

DOWAS NEWS

2011

Vol14 No.2



第 15 回海洋深層水利用学会全国大会・伊豆大会報告
山田勝久（海洋深層水 2011 伊豆大会実行委員会・委員長） … 1

海洋深層水利用学会 2011 年度 第 2～5 回理事会報告
海洋深層水利用学会事務局 … 6



海洋深層水利用学会

第15回海洋深層水利用学会全国大会・伊豆大会報告

山田勝久（海洋深層水 2011 伊豆大会実行委員会・委員長）

1. はじめに

海洋深層水利用学会第15回全国大会を迎えるにあたり、その開催地に指名された伊豆としては、既に大会を開催した経験を有し、また海洋深層水取水事業の大先輩でもある静岡県水産技術研究所にもご協力をお願いして“オール静岡”の意気込みで、その準備に着手いたしました。遡ること1年以上前のことです。会場の選定には、地元伊東にある伊豆海洋深層水利用組合がその上部組織である伊東商工会議所に献身的に働きかけてくださり、商工会議所ホールを無償にてご提供頂ける運びとなった次第です。本大会は自治体主体ではなく、上述の伊豆海洋深層水利用組合や伊東商工会議所という民間団体主体で実行委員会を組織したので、会場を確保することが容易ではありませんでした。これにあたり伊東商工会議所には会場を提供頂いた上、大会の運営にスタッフまで動員して頂きました。さらに本大会に出席される皆様に、地元伊東の良さをご理解頂きたいとの思いから、昼食のお弁当の品揃えや懇親会の手配ならびにイベントについても自ら、ご企画と運営に当たっていただきました。これら伊東商工会議所のご厚意に対してこの誌面を拝借して、心よりお礼申し上げる次第です。

今回の大会は、前日の夕方に伊東商工会議所3階の会議室で催された「全国海洋深層水利用者懇話会」（伊豆海洋深層水利用組合主催）から始まりました。定員30名のところ60名を超える参加者を得て、慌てて椅子を運び入れ、また一部の参加希望者には、大変恐縮ながら入場をご遠慮頂いたと言う一幕もありました。その時のご無礼をここに深くお詫び申し上げます。

さて伊豆大会では、「海洋深層水と生きる、新しい日本へ」というサブタイトルを付けさせていただきました。これは今年3月11日に発生した東日本大震災に呼応した気持ちを表したものです。不幸にも東北地

方太平洋岸で発生した大地震は、福島原発事故という人災も誘発し、現在の日本に暗い影を落としています。こうした状況の中でも、私たちは明日に向けて希望を抱いて生きていかねばなりません。海洋深層水がそうした希望の一条の光になることを祈念して、本大会を位置づけました。その甲斐あってか、28演題もの一般講演があり、またこれらに若手研究者が登壇するという形で、学会としても希望に満ちた大会となりましたことは、本大会の実行委員長として心から喜んでおります。それではここで皆さんと一緒に本大会をふり返ってみることにしましょう。



全国海洋深層水利用者懇話会

2. 大会概要

会期：2011年11月17日（木）～18日（金）

会場：静岡県伊東市銀座元町6-11

伊東商工会議所大ホール

後援：文部科学省、水産庁、静岡県

協賛：伊東市、伊東商工会議所、いとう漁業協同組合、JA あいら伊豆、伊豆海洋深層水利用組合、駿河湾深層水利用者協議会、明王物産(株)、(株)エル・エスコポーレーション、日清オイログループ(株)、(株)ディーエイチシー

参加者：150名

<内訳>

会員 83名 (55.4%)
 非会員 47名 (31.3%)
 学生 20名 (13.3%)



会場を埋めつくす伊豆大会参加者



伊東市・佃市長の祝辞

本大会から初めての試みとして、民間の団体や企業からの協賛を募集し、本大会をとおして試飲や試食用の商品をご提供頂いた企業に学会誌「海洋深層水研究」12巻第2号（講演要旨集）巻末に広告を掲載させて頂きました。これらの団体や企業には、懇親会でも大変ご尽力を頂きました。

また本大会では、学生の参加者数が増加した（特に台湾からたくさん参加くださいました）こと、学生の発表が増えたことが挙げられます。開会挨拶で申し上げましたように、科学技術の進歩には、その努力に対する連綿とした継承が必要とされ、その原動力である若い人たちの存在こそが学会の財産とな

ると考えています。こうした意味でも本大会はひとつの希望の灯りを灯してくれたのではないのでしょうか。

3. 一般講演

全5セッション（全28演題）

1 海洋・水質関連：3演題

座長：津久井文夫・静岡県水産技術研究所

2 生物・水産関連：8演題

座長：川嶋尚正・静岡県水産技術研究所

3 農業・畜産関連：2演題

座長：兼島盛吉・沖縄県海洋深層水研究所

4 健康・医療関連：7演題

座長：松村航・富山県農林水産総合技術センター水産研究所

5 利活用システム関連ほか：8演題

座長：津嶋貴弘・高知県海洋深層水研究所

一般講演では、海洋深層水に関わる極めて広範囲の分野について、日本のみならず、韓国、台湾からの知見や研究が多数報告されて、参加者一同改めて海洋深層水に関する造詣を深めることができました。また質疑応答でも活発な意見交換がなされ、本大会参加者の海洋深層水に対する関心の深さを彷彿とさせました。



満席の中、発表を真剣に聞き入る参加者

4. 特別講演

1 台湾における海洋深層水の資源利用の現状

高橋正征：台湾国立中山大学海洋科学学院
アジア・太平洋研究センター

2 地球最高の資源・海とともに生きるひと

木村恵美子：タタライフサイエンス・リサーチセンター／
(財) ムィ・パーストワール医学研究センター

座長：山田勝久（㈱DHC 海洋深層水研究所）

特別講演では、最新の海洋深層水事業展開の一例として、台湾における開発状況について高橋会長自らご講演されました。また海洋深層水に豊富に含まれるミネラル成分と健康の関係について、この分野での第一人者である木村先生にご講演頂き、参加者は改めて海の水としての海洋深層水の真なる価値を再認識しました。



高橋会長の特別講演



木村先生の特別講演

5. 特別シンポジウム

1 海洋深層水と生きる海の主役たち

1-1 海洋深層水からの微生物の宝探し
今田千秋・東京海洋大学

1-2 たのもしい基礎生産者－珪藻－
鈴木秀和・東京海洋大学

1-3 深海に生息するベントスの生活史
－棘皮動物を中心に－
若林香織・東京海洋大学

2 海洋深層水と生きる、新しい日本へ

2-1 水産増養殖分野への可能性

－アカザエビの養殖－

吉川昌之・静岡県水産技術研究所

2-1 ヒトにとって水らしい水、海洋深層水

山田勝久・DHC 海洋深層水研究所

本大会のサブタイトルである「海洋深層水と生きる、新しい日本へ」を具体的に展望することを目的として、本シンポジウムを企画しました。第1部は、海洋深層水の環境に棲息している生命について「海洋深層水と生きる海の主役たち」と題して、微生物からベントスに至る生命の営みについて3名のパネリストに講演頂きました。第2部では、様々な生命が宿る海洋深層水の利用について、2名のパネリストから説明がありました。パネルディスカッションも非常に盛り上がりました。



シンポジウムでの講演（著者）



シンポジウムパネラーへの質疑応答

6. 懇親会

日時：2011年11月17日（木）18:30～
 会場：ホテル暖香園6階 バンケふじ
 参加者：100名



暖香園の贅を尽くしたおもてなし料理



懇親会で乾杯の音頭をとる
 伊豆海洋深層水利用組合・佐藤組合長

7. 施設見学会

本大会の施設見学会は、伊豆赤沢海洋深層水関連施設でした。学会参加者にとっても初めての経験となるため、希望者が定員を超える場面もありました。

実際に見学された参加者は3班に分れて、7,500坪の敷地内を(株)DHC赤沢温泉のマイクロバスで取水施設、分水施設ならびに飲料水製造施設を見学頂きました。さらに配布された割引チケットで「深層水スパ」や「日帰り温泉館」などの施設を体験した帰りのバスの中では笑顔が絶えませんでした。



パティシエによる海洋深層水デザート作りの実演



施設内はDHCのシャトルバスで移動



見学会では笑顔がいっぱい

8. おわりに

おかげさまで盛況のうちに幕を閉じることができた今回の大会でしたが、若干の課題もありました。まず大会会場についてですが、本大会では伊東商工会議所の全面的な理解と協力を得て、大ホールを無償でご提供頂きました。本ホールは、円滑なスライドプレゼンテーションを行うには部屋が細長くやや天井高が低いため、またスライド映写用の大型スクリーンがなかったため舞台奥の壁面に直接映写する方法をとり、後方席では見え難いところもありました。さらに窓に暗幕がなく、閉じたブラインドの間隙から伊豆の明るい日差しが侵入し、昼間の発表においてスライドが判読しにくい場面が生じたことは、実行委員長として誠に申し訳なく、ここにお詫び申し上げます。さらに特別講演において、講演者のスライドのOSが異なるために持参されたパソコン自身をプロジェクターに付け替えした際、不具合が生じて、講演の進行をしばらく中断せざるを得ないという事態が発生しました。こうなると地元ボランティアのスタッフでは処置に困惑し、会場内の参加者に応援を求めて対応するという場面を経験しました。座長席にいた著者が汗顔の至りであったのは言うまでもありません。また同次元の問題として、例え同じOSであってもバージョンが異なると、アニメーションが設定どおりに作動しないなどの事態も想定されます。本大会でこの事態が生じていたか否

かは承知しておりませんが、こういう事態は発表や講演のプレゼンテーション力が低下してしまい、発表者も聴衆もモチベーションが下がってしまう恐れがあるので、出来れば予め回避する手立てを検討するべきかと存じます。

こうした事態を避けるために、最近では多くの学会で自分自身のPCでの発表、講演方式に移行しつつあります。そのためには、現在の発表者用と次の発表者用のケーブルとその切り替え装置やシステムなどの用意が必要となります。また今回は伊東商工会議所で用意して頂いたリモコン（レーザーポインター付）についても、使い方を把握すればプレゼンテーション力を増大し得る機材です。しかしながら学会開催地として取水地をめぐる場合が多い、当学会の全国大会においては、これらの機材を地元で用意することは困難が予想されますので、何かの機会に学会にての保有をご一考いただければ幸いです。

9. 謝辞

最後に本大会で後援、協賛頂きました団体および法人、またご多用のところ本大会でご祝辞を頂きました伊東市の佃市長ならびに静岡県の日向水産業局長、さらには特別講演およびシンポジウムの講演をお引き受けくださいました先生方、そして各地から本大会にご参加頂きました皆々様に、この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます、大会後記の筆を置かせていただきます。

海洋深層水利用学会 2011 年度理事会報告（事務局）

【海洋深層水利用学会 2011 年度第 2 回理事会】

(メール審議)

発信日：2011 年 9 月 1 日（木）

議題：入会に関するメール理事会

審議内容：2011 年 8 月度に申込みの入退会希望者について理事会での承認を求めた

審議結果：異議なく了承され本人に文書で回答した

【海洋深層水利用学会 2011 年度第 3 回理事会】

発信日：2011 年 9 月 30 日（金）

議題：入会に関するメール理事会

審議内容：2011 年 9 月度に申込みの入退会希望者について理事会での承認を求めた

審議結果：異議なく了承され本人に文書で回答した

【海洋深層水利用学会 2011 年度第 4 回理事会】

発信日：2011 年 11 月 1 日（火）

議題：入会に関するメール理事会

審議内容：2011 年 10 月度に申込みの入退会希望者について理事会での承認を求めた

審議結果：異議なく了承され本人に文書で回答した

【海洋深層水利用学会 2011 年度第 5 回理事会】

日時：2011 年 11 月 17 日（木）

場所：伊東商工会議所 3 階中会議室

配布資料：

資料 1 研究発表企画委員会報告

資料 2 論文誌編集委員会報告／
委員長交代について

資料 3 ニュースレター編集委員会報告

資料 4 ホームページ編集委員会報告

資料 5 放射性物質の海域流出による
海洋深層水への影響について

資料 6 会員の動向

添付 台湾石材・資源産業研究発展センター
林志善総経理からの要請書

議事：

1. 研究発表企画委員会より

研究発表企画委員長・清水理事より資料 1 に基づき説明があった。

■本日開催の第 15 回全国大会について

・応募が 154 名あった。予想の 90 名を上回っており、会場が満杯に近い状態になっている。

■来年度の第 16 回全国大会について

・既に決定している通り、伊豆大島での開催になる。本日、東京大学の犬内教授(本学会理事)のとり計らいにより、大島町副町長の原田浩氏に懇親会への臨席を頂き挨拶を頂く予定である。

■再来年度の第 17 回全国大会誘致について

・候補が絞れていない状況であるが、①青森県深浦町 ②台湾 ③国内の大学 の 3 か所を検討中である。2012 年度の総会までには理事間で審議のうえ決めたいと考えている。

2. 論文誌編集委員会より

論文誌編集委員長・藤田理事より資料 2 に基づき説明があった。

■第 12 巻第 1 号について

・表紙を一新しカラー刷りに変え、9 月に発行した。

■第 12 巻第 2 号について

・要旨集特別号なので編集には携わらなかったが、2 段書きを整えるようにした方が良かったように思う。奥付の Vol.12. No.2 となっている。(正しくは Vol.12 No.2)

■第 12 巻第 3 号について

・今大会の中から論文を募り編集していきたいと考えている。

■論文誌編集委員会の位置づけについて

・「海洋深層水研究」はニュースレターなども含み論文だけではないので、今後は論文誌ではなく「学会誌」と呼ぶ。ただし、ニュースレター編集

委員会・論文誌編集委員会が個々に存在するので「論文誌編集委員会」の名前はそのまましておく。

3. ニュースレター編集委員会より

ニュースレター編集委員長代理・大塚理事より資料3に基づき説明があった。

■Vol. 14 No. 1 について

・学会誌の第12巻第1号の掲載になって発行された。

■Vol. 14 No. 2 について

・学会誌第12巻第2号の掲載に間に合わなかったので年内12月には発行したい。

■Vol. 14 No. 3 について

・内容は未定であるが発行は年度内2012年の3月に予定している。

4. ホームページ編集委員会より

ホームページ編集委員長代理・大久保氏より資料4に基づき説明があった。

・主な更新内容は、研究発表会の新規メニューの追加であった。

・間もなくニュースレターVol. 14No. 1の掲載と学会誌第12巻第1号の目次の掲載をアップできる見込みである。

5. 論文誌編集委員会委員長交代について

高橋会長より提案があった。

・現在の藤田委員長が約6年半務めているために、この辺で交代していただくことと、新編集委員長を井関理事にお願いしたい。学会誌は発刊時期が年度ではなく、年になるので2012年1月から任に当たっていただきたい。

また、これまで編集委員長の任期が決められていなかったため、今後は1期2年を目安にしていくことが望ましいと考えている。

→異議なく了承され、次期2012年度総会で正式交代を報告することになった。

尚、編集業務が円滑に進むように12月から交代事務引き継ぎを徐々に進めていく。

6. 2012年度の理事選挙について

大塚事務局長から報告があった。

・2010年度の理事選挙の選挙管理委員会委員は、下村氏・真鍋氏・池田氏であった。

池田氏には留任してもらおうと考えるが、下村氏は長年務めたため固辞されており、

真鍋氏も長年務めていただいたので、新たに2人の依頼を考えている。

候補者はいないか。

→特に名前が挙がらなかったため、年内に事務局と高橋会長・松里副会長が候補者会員に交渉して決めていくことになった。

7. 放射性物質の海域流出による海洋深層水への

影響について

大塚事務局長より、資料5に基づき説明があった。

・今年度の総会において取り上げられた放射性物質流出の風評被害について、声明文を作成したので、学会名で発信したいと思うがこの文章でよいか。

→事故に対して「遺憾である」という強い表現を使用し、厳しい文章ではっきり言い切るなどの推敲を加えて発表することになった。今大会では、大会終了時の松里副会長の挨拶で参加者に説明することになった。

8. 2013年度第17回全国大会について

台湾石材・資源産業研究発展センターの林志善総経理からの公式申し入れ文書の紹介とともに高橋会長より説明があった。

→協議の結果、2013年度の候補地として台湾を第一候補にして、今後問題点などを理事会で検討・決定し、2012年度の総会に諮ることになった。

以上